

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人、グループホームの理念は常に職員が出勤時に目視できるように掲示している	「信頼・安心・貢献」という法人の理念を基にした、開設以来のホームの理念がありその浸透を図っている。新型コロナウイルスの影響を受け、従来行っていた朝礼時の唱和は現在休止とし職員は出勤時に確認している。法人理念については全職員が答えることができ、また、例年であれば新入職員には法人の人材育成チームが主となって教育をしている。各ユニット玄関や事務所には理念が掲示され、現在は新型コロナウイルス感染防止のため来訪者は限られているが外部の方にもわかるようになっている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	近隣の方より、菊の鉢植えをいただき玄関で楽しむ事ができた。	地元自治会に法人として加入し、協力費を納め、随時情報も収集している。現在新型コロナ禍ということもあり、例年ボランティアにより実施しているアコーディオン演奏やハーモニカ演奏、折り紙、クリスマス会や敬老会での歌や踊りなども休止となっているがコロナ収束後の再開を期している。また、例年、複合施設全体の夏祭りには地域住民やボランティアの参加も多くあり、利用者との交流の場となっていたが、こちらも休止となっている。更に、従来実施していた外部の宅老所主催のクリスマスコンサートについても中止となる可能性が高い。従来、併設の施設で受け入れている実習等の際のホームの見学・説明も休止しているが、コロナ収束後は再開を予定している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	村が主催の初期集中支援チームは休会しているが、再開時は参加できる準備を整えている		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議は開催できていないが、利用者の近況報告は、文書にし郵送している	新型コロナ前は3名の家族代表、区長、民生児童委員、村村民生活課職員、地域包括支援センター職員、ホーム職員が参加し、奇数月に開催していたが、現在は書面での開催となっている。書面で利用状況の報告や生活の様子・活動の報告などを行い、参加者から電話等で意見をいただいている。また、身体拘束についても書面で説明し、拘束のない介護に当たっている。従来であればボランティア紹介のお願いも随時行っていたが再開が待たれるところである。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	高山村福祉課担当者や地域包括、高山村社協とは、グループホームの空き状況、待機順番など連絡を取り合って情報交換を継続している	コロナ前は村主催の認知症サポーター養成講座に協力し、地域住民や小学生などへ認知症について理解を深める活動を行っていたが現在は休止となっている。同じく、新型コロナ前の介護認定更新の際には市町村の調査員が来訪し、家族が立ち会えない場合は、事前に家族と連絡を取り、職員が対応していたが、現在延長申請などで対応している。また、必要に応じ申請の代行もホームで行い、村連携室とは利用状況や空き情報等を共有し、常に連携を図っている。	

グループホーム朝日

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束対策委員は継続して担当しており、センサー設置から解除まで、職員間で情報共有できるようにしている	ホームの転倒防止委員会が中心となって拘束について職員会議で検討したり、内部での必須研修として身体拘束研修を行うことにより、職員の意識を高めている。所在確認や安全確認のために家族の了解の下、空間センサーやセンサーマットを使用している方がいるが、それに頼りきりにならないように外していく方向で毎月検討をしている。外出傾向にある利用者については一緒に外へ出て散歩するなど、本人の意向を尊重し寄り添っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	事故とヒヤリハットの違いを把握し、適切な報告により、委員会と担当で原因の分析をしている		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在、ご家族や利用者からの相談はないが、いつでも質問に答えられるように、知識をつけておく努力をしている		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	初めての施設利用者に対しては、ご家族やご本人にわかりやすい説明を心掛けている		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族の面会時などに短時間で様子報告や意見を聞いている。必要な情報は職員間で共有をしている	何かしらの意思表示ができる利用者が多く、状態により意思表示が難しい時は家族からの情報や生活歴を基に日常生活の中での表情や仕草などから読み取るようにしている。新型コロナのため家族との面会が直接できないがホーム玄関の中扉を挟み窓越し面会が可能となっている。LINEを使用できる環境の家族が大半で、また、電話の方も含め、意見要望を聞いたり、様子を伝えている。更に、ホームの敬老会などの様子や利用者の様子が載った写真などを家族にLINEで伝えるなど、視覚面からの情報発信も行っている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	会議の開催が困難な状況であり、情報に関する事は、連絡ノートでの共有をしている。各職員から出た意見は、それぞれの担当者が管理者へ報告する体制をしている	新型コロナの前は事前に職員から議題を聴取し、毎月、職員会議とカンファレンスを実施していたが、現在、集合することはなく、連絡ノートで伝え合っている。従来からユニットごとのスタッフの固定はせず、職員全員が全利用者を把握できるようにしており、今も継続している。年度初めの管理者との面談も新型コロナで休止となっており、今後は希望に合わせて職員の見解や要望を聞き運営に活かしていきたいとしている。人材育成チームが中心となって実施していた職員の研修や育成も自粛ぎみとなっているが、コロナ収束後は再開予定である。法人としてのストレスチェックは継続し、職員の精神面のケアを図っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	勤続年数が長い職員は、職場の配置換えを検討した。介護職から相談員業務へ又は、主任へ昇格するなど実践した		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	今年度、外部研修を受講する事は出来なかったが介護福祉士協会の監事を受けた職員がおり、今後、他施設との情報交換の場としていけるように検討する		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	物忘れ支援ネットワーク会員の多職種でのリモート会議を行い情報交換をしている。年度末には研修会を行う予定でいる		
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居時のご家族の負担を軽減するため、お迎えは職員も付き添うように対応した。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	高山村の3施設での申し込みがあった時点で、相談員が必要であれば、他施設の情報をご家族に伝えるようにしている		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	他施設への住み替えは、退院時の状態や嚥下状況、医療行為等を主治医に相談し、ご家族との話し合いを実施している		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	茶碗洗いや、洗濯物をたたむ等、日課としてではなく、出来るときに依頼している		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会は窓越しを継続している。ご家族の理解はあるが利用者の理解は困難な場合が多いが窓越しで誕生日を祝う家族もいた。年賀状はほぼ全員がだし、返事が届いている		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	利用者が娘に教えた料理の味付けを、娘が弁当で差し入れをしてくれた。食している様子を動画で送信している。手紙も届き、利用者は居室に貼り安心されている。他の利用者はいつも手元に置き読み返している。	新型コロナのため、知人や友人の面会については窓越し面会としている。そうした中、電話、手紙・年賀状のやり取りをし旧交をあたためている方もいる。例年であれば、年末年始やお盆の時期に家族が迎えに来て、外泊や外食へ出かけられる利用者もいたが、新型コロナ禍ということ自粛しているが、収束後は実施する予定でいる。ホーム内で利用者同士が居室を歩き来するなどの姿も見られ、良い関係性が保たれている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず に利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	寝たきりとなっている利用者の居室を訪室し、声をかけている様子がよく見られている。また、就寝前には声をかけあい、明日の約束をしている事が毎晩のように見られている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	法人内に住み替えをした利用者の情報は、相談員会で報告があるため、必要に応じて連絡をして、近況のお話をする事もしている		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ご家族、親戚、知人の方が来訪された際に、以前の様子やよくしていた話し等情報をもたらしている。	殆どの利用者が自らの意思を伝えることができ職員はできるだけそれに沿うようにしている。意思表示のできない方については利用者の生活歴や家族からの情報、表情、仕草などから利用者 に合った選択肢を提示したり、思いや意向を把握している。また、必要に応じてセンター方式やひもときシートを使用して利用者の理解に努めている。更に、日常のつぶやきを介護日誌やケース記録に細かく記載し、職員間で情報を共有し、ケアに活かすようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	前サービス事業者からの情報把握に努め、なるべく変わらない環境を提供している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	ケアチェック表での評価を実施している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	長期目標についてはご家族と本人の意向を重視し、職員間で出来る事や出来ない事を把握し、支援に繋げている。	利用者3名に対して2ないしは3名の職員の担当制をとっているが、全職員で全利用者を把握するようしており、介護計画の長期目標は6ヶ月、短期目標は利用者ごとに設定し、3ヶ月ごとに見直しをして、状態に変化があった場合はその都度変更している。また、モニタリングは毎月実施し、家族の意向は窓越し面会時や電話などで随時確認をしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	サービス内容に基づいた評価をし、ケース記録に記載している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	他施設からの専門職の意見や情報提供を参考に職員がどう支援できるのか検討している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	ホームには、温泉が出る為、入浴を楽しみにしている利用者が多い。温泉という事で元気がでるといふ発言もある。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医の往診や定期的な薬剤師の健康管理は継続支援している。かかりつけ医は夜間の急変時に対応可能となっている為、より安心な医療を提供できている	約三分の二の方が村内の医院をかかりつけ医として受診している。医療機関の違いはあるが月に1回ないしは2階の往診があり健康状態の確認と相談が可能となっている。専門科目への受診は基本的に家族対応であるが、緊急時や都合がつかない場合などは職員が付き添い、受診結果は速やかに家族へ報告している。また、常時、敷地内の老人保健施設の看護師の協力が得られるようになっている。歯科については必要に応じて連絡を取り家族が同行している。更に、薬剤師による薬剤指導を受けている方もほぼ半数近くいる。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日中は両施設の看護師の応援体制があり、夜間も看護師が居るときがあるため、いつでも相談できる状態となっている		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院先の医療連携室の担当者とは、連絡を密にし、退院調整を行っている。須坂市の病院とは情報交換の会議を行い各施設の現状を報告した		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	現在、4名の利用者の看取り介護を実施している。ご家族、医療とのICを実施した際、ご家族の希望が聞かれている	入居時に看取りの指針に沿って説明後、意向を確認し、看取りの状態になった時は再度説明し同意を得ている。開設以降、数名方の看取りを行っており、事前に家族や医師、看護師と話し合いを重ね、職員会議で職員間での理解を深めていたことから混乱なく最期を看取ることができたという。また、お見送りの際には他の利用者も一緒にお別れをしたという。現在、看取り介護に入られている方がおり、職員間での意思統一を図っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急マニュアルに基づき、指導をしている。主治医への連絡と指示からの一連の動きは理解できている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の消防訓練は継続している。新人職員は通報から消火訓練まで実際に行う事で学んでいる。合同訓練は地元の消防団も参加している	例年、消防署立ち会いの下、ホーム独自の訓練と併設施設との合同訓練を実施し、土砂災害想定や夜間の火災想定などで行っている。今年度はグループホームのみの訓練を行い、地元消防団も参加し、訓練後には避難訓練レポートを提出し、法人の防災委員会で話し合い、次回に活かしている。また、地元地区と防災協定を結んでおり、複合施設として災害時には地域住民を受け入れる体制が整っており、例年、地区の防災訓練にも職員が参加している。連絡網や緊急マニュアルも整備され、同じ敷地内の特別養護老人ホームに食料や水などの備蓄が置かれている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	介護福祉士が12名おり、専門職としての声掛けを行っている。	新型コロナで現在難しくなっているが例年であれば外部の接遇研修に参加し、その内容を職員会議でフィードバックしている。そうした中、法人作成の「介護の本質」の読み合わせをすることによって職員の人権意識を高めている。利用者への呼びかけは基本的に苗字や名前に「さん」付けで敬意を込めて行っている。同性による介護は可能な限り対応するようにしているが、シフト上難しいこともあるため、事前に本人や家族へ十分説明した上で、実際にケアに入る前にも本人へ伝え了解を得て行っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者からの申し出があった際は、解決できる糸口まで、本人が納得いくように話しをしている		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入浴など、予定日であったとしても、本人が乗り気でなければ、無理強いはいないように、日時を変えて声掛けをしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	翌日着る洋服は前夜に利用者と一緒に選ぶようにしている。入浴後にご自分でアイロンを当て、セットする方もいる		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	コンビニエンスストアから食べたい物や飲み物を取り寄せし、食事時間が楽しみとなるように工夫している。ご本人の調理方法等聞きながら盛り付けを行っている	献立は法人の管理栄養士が作成し、併設施設の厨房で調理している。食事形態は常食やお粥、軟飯など様々であるが、多くの利用者が自力摂取や見守りで摂取でき、全介助の方が若干名となっている。新型コロナ禍のため調理レクリエーションの頻度は減りつつあるが、果物の差し入れがあった時などは皮むきをしたりする機会がある。また、例年であれば年に数回、近くにある温泉施設の食堂へラーメンを食べに行くこともあるが、コロナ禍のため自粛となっており、収束後には再開する予定である。	

グループホーム朝日

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量の低下が見られている際は、栄養補助食品で補っている。必要な利用者には食事チェック表で管理している		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	歯間ブラシやマウスウォッシュを取り入れ、口腔内の衛生管理に努めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	各利用者の排泄状況を把握する為、チェック表にて管理している。布パンツから使い捨てに切り替える際は、昼と夜で様子を確認しながら対応している。	介助を必要としない方は若干名で大半の方が見守りや介助が必要で、排泄チェック表や生活パターンを基に定時誘導し、日中はトイレでの排泄を心掛けている。排泄方法や使用する介護用品の変更に関しては随時家族へ相談し、了解を得ている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	ヤクルトやヨーグルト、牛乳などご本人の好みを物を取り寄せ食している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	健康状態やその日の気分にあわせて、午前、午後いつでも入浴対応が取れるように対応している。	自立の方が数名おり、職員2名での介助が必要な方もいるが、他の方は見守りをし一部介助となっている。基本的には週2回以上の入浴を行い、入浴を拒否される方には時間を置いたり、声掛けを工夫するなどの対応をし、血圧が高かったり、体調がすぐれない場合は後日に入浴をしている。また蛇口から温泉が出るため、温泉気分を味わうことができるばかりでなく、随時、菖蒲湯やゆず湯など季節を感じることでできるイベントも行っている。脱衣室は床暖でファンヒーターなども用意されている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	居室で入眠できない利用者はフロアで休息できる環境を整えている。眠前薬などは内服しないで安全に過ごせる状況を支援している		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	利用者1人に対しての内服確認は3名の職員が対応している。薬剤管理指導を受けている為、いつでも相談できる状況はできている		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	食後には気の合う利用者同士でコーヒーなど飲みながら歓談している。しばらく世間話しをすると各自居室に入り、一人の時間を楽しんでいる		

グループホーム朝日

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	コロナ禍において外出支援はできていないが、天気の良い日は、施設の周りを散歩する事はできた。	現在ホーム内では三分の一弱の方が車いすを使用しており、外出時には約三分の二強の方が車いすを使用している。日常的には少人数に分かれてホーム周辺を散歩したり、外に椅子を並べて外気浴をしている。例年であれば、年間行事計画に沿い、桜の時期には周辺の桜並木を鑑賞したり、村内の花見スポットへドライブに出かけたり、紅葉狩りや家族と共に善光寺へ外出したり、また、近くの温泉施設へ外食へ出かけることもあるが、現在は自粛となっている。新型コロナ収束後には再開する予定である。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	外部の業者への支払いは、自分で管理している財布から支払いをする方もいる。管理が不可能な方は、職員が付き添い支払いを済ませている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援している	家族からの差し入れや荷物が届いたお礼の電話はホームから入れるように支援した。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	床暖房とエアコンを併用し、室温を保っている。30分に1回、換気を実施。清掃はなるべく早朝に済ませ、清潔な環境で食事ができるように配慮している。	食堂兼リビングは床暖房とエアコン、加湿器で温度と湿度を調節する等、快適に過ごせるようになっている。新型コロナ対策として三つテーブルを離して使用している。食堂は広すぎず、壁には行事の写真が貼られている。各ユニットの廊下は長く一直線に伸び、利用者の歩行練習の場ともなり、各ユニットには車いすでも利用できる広さのトイレが2ヶ所設置されている。浴室は家庭と同じ半埋め込み式の浴槽で、冬季はヒートショック予防のため、床暖の脱衣室で更にファンヒーターを運転させリスク回避に努めている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	その日の雰囲気やいつのまにか利用者同士の話しが弾み、和やかになっている際は、普段とは違う飲み物を提供し、ゆったりとした時間を過ごせるように支援した		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	編み物を趣味をしている利用者は、居室にテーブルを置き、テレビを観ながら、楽しんでいる。ときには、コーヒーを飲みながら新聞を読んだりされている	各居室にはベッド、クローゼット、洗面台、換気扇が完備され、居室温度はエアコンと床暖房で調節されている。また、全居室が南側に面しており、日当たりがよく明るく感じられる。居室には使い慣れたカラーボックスやテレビ、両親の写真が入った写真立てなどが置かれている居室もあり、生活感を感じることができた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室内での動きを把握するため、空間センサーを使用し訪室している。その時に必要な援助をし、危険な状況とならないように努めている。		